

第1回兵庫県立大学評価委員会 議事録

1 会議の日時及び場所

- (1) 日時 平成24年11月16日(金) 15:00~17:00
- (2) 場所 兵庫県公館 第2会議室

2 出席した委員

石川委員長、瀬川委員、西門委員、西川委員、藤田委員

3 出席した職員

- (県立大学) 清原学長、太田副学長、新免副学長、高坂副学長、楠見事務局長、
藤原事務局副局長、藤森事務局副局長兼総務部長、林事務局企画調整部長
- (兵庫県) 片山管理局長、永良大学室長

4 会議の内容

- (1) 開会
- (2) 挨拶
- (3) 出席者紹介
- (4) 議事
 - 委員長選出
 - 石川委員を委員長に選出
 - 委員長職務代理の指名
 - 藤田委員を委員長職務代理に指名
 - 中期計画の概要
 - 県立大学より資料1により説明
 - 評価の進め方・視点について
 - 教育・研究分野における項目別評価について
 - 事務局より資料2及び3により説明し、項目別分野を含めた意見交換を行った。
 - (下記5参照)
 - 今後のスケジュール
 - 事務局より資料5により説明
- (5) 閉会

5 意見交換の概要

兵庫県立大学に統合したことで、就職先等の問題も含めて、どれだけの効果があがっているのか。

全学的な機構、キャリアセンターの設置など全県キャンパス構想を展開し、全学として特色化を図ってきた。就職率については、比較的90%を超える就職率を保っていたが、昨年度やや下がり、危機感を持って就職支援の強化を図っているところである。

学生が大学に求めるニーズと、社会が学生に求めるニーズの両面は異なるものであり、どちらの視点からも全体を把握したいと思っている。留学生の積極的な確保については、積極的に海外に働きかけて学生を獲得しているのか。また、兵庫県立大学が統合してよかったという形が浮き上がるような評価をしていきたい。

県立大学だけでなく全体的に学生の基礎学力が不足しレベルが下がっていると感じるため、基礎学力の向上に力を入れていただきたい。また、学生の論理的な思考力・表現力についても鍛えていただきたい。グローバル人材の育成については、語学力だけでなく、精神的に海外に強い人間を育てていただき世に送り出してほしい。留学生の受入については、理系学部の留学生を増やす対策が必要だと感じる。

高い目標を掲げ常に高い意識を持っておかなければ、計画の達成は難しいものである。留学生の受入については、人数の問題だけでなく、どういう人材を受け入れて育てていくかというポリシーを持つことが重要だと感じている。

基礎学力の問題、グローバル化の問題、留学生の問題は、県立大学だけでなく全国の大学に課せられた解決すべきテーマだと認識している。また論理的な思考力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力には特に力を入れてそのための教育の内容と方法を検討している。

グローバル化の問題は、留学生も含めてアジア地域における人材育成を行うことが、グローバル人材の育成にもつながっていくと考えている。現在、経済学部でインターナショナルキャリアコースを始めており、今後語学教育だけでなく、より専門教育にもまたがるような人材育成のグローバル化を進めていきたい。

理学部にくる留学生はバングラデシュからの留学生が多く、各教員に突然メールが送られてくることが多い。学位を取得後、帰国して仕事を続ける人がほとんどであり、そういう留学生が日本との架け橋となってくれと期待している。また、文部科学省で採択されたリーディングプログラムでは現在学生を集めているが、そのうち数名は外国人学生を集める予定であり、そういう学生についても将来の県立大学との架け橋になっていただこうと考えている。

工学部では、色々な分野に対応できる柔軟な基礎学力をつける必要があるため、それぞれの分野で基学力をきっちりと教えている。またキャリア教育では、「ひょうごのものづくり」という科目で、県下に就職されているOBの方に講義に来て頂いている。論理的な思考力を身につけさせるため、レポートを定期的に日本語でしっかり書かせている。また、海外志向については、博士前期課程以上は海外の国際会議で発表させ、海外への意識を高めているところである。

大学の自己評価は5段階評価だが、平均を見ると3段階評価になっているように感じる。評価を厳しくし、計画より遅れているものは、なぜできていないのかということ掘り下げていくことで将来への指針ができるのではないかと思う。

県立大学が統合したことで、同じ土地に同じように作らないのはなぜか。また統合してから中途退学の状況はどうなっているのか。

焦点を絞った評価を厳しく行っていただきたいと思っている。全学の学生が参加できる「防災教育ユニット」というプログラムを始めており、現在いくつかのプログラムがキャンパスを超えた共通の学びの場を作っている。中途退学者については、そんなに多くはないが、明確な理由がない留年者への対応については、全学的な体制を作ることが今後の課題であると感じている。

兵庫県立大学が日本や世界の中でどういう役割を果たしていくのかという中長期的な大きな目標を念頭に置きながら、色んな評価の段階で浮き上がってくるよう大学の将来を含めた評価をしていきたい。

総合教育・基礎学力の問題は、各学部がナンバーワンではなく、オンリーワンになるということに通じている。大きな目標を掲げながら達成に向けて頑張っているということが世間から評価されると、評価もあがってくると思う。

「他専攻科目の充実及び促進」の部分では、評価は「5」となっているが、他の学科と一緒に新たな講座ができるなど、開講数や受講者数だけでの評価では寂しい。また、国際交流の推進では、推進は進んでいるという評価に対して、帰国外国人留学生等のデータベースができていないと評価されており、この2つは一貫したものであるため、どちらもできていて初めて進んでいると言えると思う。

他専攻科目の充実については、制度は用意してあるものの、キャンパスが異なるなど現実的には進んでいない現状もあり、学生が集まることができる時間やシーズンを活用するなどの改革をしている。データベース構築については、全くできておらず、国際交流の体制として不十分である。

時間的に全部評価するのは難しい。そこで、強弱をつけた評価を行っていくべきである。特に個性と特徴を伸ばすという観点から「5」と評価されたものを重点的に評価を行っていくべきである。

兵庫県立大学の「先端研究の推進」「専門職業人の養成」「自然環境・地域・景観という他の大学にない分野」の3つの特徴を伸ばしていき、大学自身もそれを含めて自己評価を行っていきたいと考えている。

評価の視点の中に、留学生が卒業してどういう進路に進んでいるのかということも必要ではないかと思う。日本で学んだ留学生は貴重な資産であり、日本で続けて活躍していただき、母国に帰った時に色んなネットワークを作ってもらうことが大切である。

大項目評価と目標の評価を含めた大きな焦点と小項目の全体がつながるような評価方法を検討いただき、次回の委員会で議論を行い、4月からの公立大学法人の橋渡しとなるような評価にしていきたいと思っている。